

〈論 文〉

## ターンプルの生涯と著作

——アバディーン啓蒙の父——

田 中 秀 夫

### I ターンプルとアバディーン啓蒙

ジョージ・ターンプル（George Turnbull, 1698-1753）は、アバディーン大学のリージェント（教授制導入以前のクラス持ち上がり教師）を振り出しに、18世紀の前半に著作活動をした思想家であるが、今ではトマス・リードを教えた人物として、あるいはコモン・センス学派の源流として登場することが多い。ターンプルは、フランシス・ハチスン（1694-1746）、ケイムズ卿（1696-1782）、ロバート・ウォレス（1697-1771）と同世代である。知名度では劣るものの、彼の活躍は、彼ら同世代人のなかではむしろ早く、1720年代から目立っており、その活躍の時代はグラスゴウ大学のハチスンとほぼ並行している。もっとも、道徳哲学に関しては、後にターンプルは自著でハチスンから学んだと明示している<sup>1)</sup>。エディンバラには、前世紀末から合邦期にかけて活躍した愛国者アンドルー・フレッチャー（Andrew Fletcher of Saltoun, 1653-1716）を別とすれば、ヒュームが出るまで、これといった思想家がいないので、それと比べると、ターンプルは目立っている。ターンプルの影響力はいまだあまり解明されているとはいえないけれども、ウッド<sup>2)</sup>はハチス

ンとともにターンプルを重視しつつ、彼らの道徳哲学は共通の要素を持っており、それはすでにスコットランドにそれ以前に定着していたものであると主張している。さらにノートン<sup>3)</sup>はターンプルをコモン・センス学派の伝統のなかに位置づけている。

マッキノン<sup>4)</sup>は、ハチスンとターンプルの上述のような類似性に注目しつつも、ターンプルがハイネキウス<sup>4)</sup>の英訳につけた序文、「道徳と市民法の本性と起源の一論」（A Discourse upon the Nature and Origin of Moral and Civil Laws）を「コモン・センス法学」としてハチスンにも先立つ先駆性を持つことに注意をうながした<sup>5)</sup>。

スコットランド啓蒙の起源については諸説があるが、スコットランド啓蒙の父についても、ハチスン説（シャーなどの多数）、第三代アール公爵説（エマソン）、ハチスン=ターンプル説（ウッド）が並立するようになった。フレッチャー説もありうるであろう。ポーコックやフィリップスは公然とは主張していないけれ

1) Turnbull, G., *The Principles of Moral and Christian Philosophy*, Vol. I, Liberty Fund, 2005, p. 14.

2) Wood, P., *The Aberdeen Enlightenment: The Arts Curriculum in the Eighteenth-Century*, Aberdeen University Press, 1993, pp. 47-48.

3) Norton, D. F., *David Hume, Common-Sense Moralist, Sceptical Metaphysician*, Princeton U. P., 1982. Chap. 4, "The Providential Naturalism of Turnbull and Kames," pp. 152-191.

4) Heineccius, J. G., *Elementa Juris Naturae et Gentium*, 1737.

5) Mackinnon, K. A. B., "George Turnbull's Common Sense Jurisprudence," *Aberdeen and Enlightenment*, eds. by J. J. Carter and J. H. Pittock, Aberdeen U. P., 1987, pp. 104-110.

ども、フレッチャーを重視している。愛国者フレッチャーの膨大な蔵書<sup>6)</sup>は、公共の図書館が貧弱であった当時において、公共的役割を果たした。このように諸説があるとはいうものの、そしてエマソンやウッドの主張にも一理あるけれども、同時代と後世への影響力を総合的に考えるとき、スコットランド啓蒙の父としてはハチスン説が説得力を持つであろう。しかし、ターンブルをアバディーン啓蒙の父とみることはできるであろう。

ハチスンと同じくターンブルは、シャーフツベリの哲学とモールズワース (Robert Molesworth) が代表する「コモンウェルスマン」の政治思想から多くの影響を受けていた。「リアル・ウィッグ」であることを自認していたハチスンとターンブルは似た思想傾向を持った思想家であった。アバディーンにおけるコモンウェルスマンの伝統については、キャロライン・ロビンズが初めて注意をうながしたが<sup>7)</sup>、それはおそらくターンブルによって持ち込まれたか、強化されたのであろう。その源泉は、シャーフツベリ三世とロバート・モールズワースにあった。

ターンブルはエディンバラの若き知的エリート集まりである「ランケン・クラブ」(Rankenian Club)に加わっていた。1716年か17年に結成されたこのクラブは、英語の文体の改善、健全な文芸の趣味、思想の自由を目指す集まりであり、神学と法学の教授と学生が会員であった。主な会員に、学長ウィシャート、チャールズ・マッキー、コリン・マクローリン、ジョン・スミバート、ジョン・ステイーヴンソン、ロバート・ウォレスがいた<sup>8)</sup>。

ランケンの会員は、バークリへの関心を深めてバークリと手紙をやりとりしていたし、グラスゴウとアイルランドのモールズワースの弟子たちとも交流を持っていた。彼らの啓蒙思想の特徴を理解するうえでこの点は重要である。彼らはシャーフツベリの思想に心酔していたが、シャーフツベリの洗練と社交性の哲学は、彼らだけが信奉したのではなく、ひろくスコットランド啓蒙の思想的源泉、思想的基盤の一つであった。シャーフツベリがロックの弟子であったことは言うまでもない。

こうしてダブリンとエディンバラ、アバディーンそしてグラスゴウの啓蒙の知的サークルは、シャーフツベリとロックの思想を紐帯としてつながっていたことになるであろう。やがて、フランクリンを介して、スコットランドの知的サークルは、ペンシルヴァニアとフィラデルフィアに、またターンブルとウィザズプーンを介して、ニュージャージーに濃密な関係を形成するであろう。

ターンブルは1698年7月11日にアロア (Alloa) の牧師の子供として生まれた<sup>9)</sup>。一年後に一家はイースト・ロージアン・タイニングム (Tynninghame) に転居した。ターンブルは、イングランドとの合邦 (1707) が行われた4年後の1711年に、13歳でエディンバラ大学に入学したが、ターンブルが卒業したのは、ほぼ10年後の1721年4月であった。その間に彼は、ウィッグ長老派の青年として、前述のように、アバディーンのマーシャル・カレッジの哲学のリージェントになり、数年間、教育と勉強を続けた。

6) Willems, P. J. M., *Bibliotheca Fletcheriana: Or the Extraordinary Library of Andrew Fletcher of Saltoun*, Privately published, Wassenaar, 1999.

7) Robbins, C., *The Eighteenth Century Commonwealthman*, Harvard U. P., 1959.

8) Mossner, E. C., *The Life of David Hume*, Oxford U. P., 1980, p. 48.

9) 以下の伝記的事実は、Stewart, M. A., "George Turnbull and Educational Reform," *Aberdeen and Enlightenment, op. cit.*, pp. 95-103.

ターンプルは、1716年か1717年にエディンバラに生まれた討論クラブ、前述の「ランケン・クラブ」に加わっていた。このクラブは聖職と教授職を目指す理想に燃えた急進的な若者の集まりで、彼らは前述のように、新しい思想、すなわちパークリの感覚主義哲学やモールズワースのウィッグ共和主義、コモンウェルスマンの思想に関心を抱くと共に、シャーフツベリの社交性と洗練の思想に心酔していた。

ターンプルは1718年にはエディンバラにいて、フィロクレス (Philocles) という偽名を用いて手紙を書いてロンドンにいたトーランド (Toland) に接触を試みていた。自由思想、道徳と宗教、トーランドのユートピア思想について意見を交換したかったからである。偽名を使ったのは、若者をひきつけてやまなかったアイルランド出身の理神論者トーランドは、スピノザと同じく、危険思想家と見なされていたからであろう。またこの時期にターンプルはフリーメイソンの論考を書き、宗教における国家の役割を制限して、思想の自由を普遍的に擁護することを目指したが、出版できなかった。こうした事実はアバディーンの関係者には知られず、ターンプルはアバディーンでは正統派に近づき、啓示宗教の役割と国家における宗教の役割を認めた。

名誉革命と合邦は、スコットランドに改革の時代をもたらしつつあった。合邦によって一体となるにもかかわらず、スコットランドは、教会と法とともに、大学は伝統的なスコットランドの制度を保全されることになった。しかし、すでに名誉改革は大学にも影響を与えていた。すなわち、1690年にスコットランド議会は大学の運営権限を教会から国王に移し、すべての大学を視察する「視察委員会」(General Commission of Visitation) を設けた。職位を確保するために教授は信仰告白と忠誠誓約に署名しなければならなくなった。アバディーンでは、監督派も信仰告白を我慢して受け入れたから、さ

ほど問題が生じなかった。委員会には3つの狙いがあった。第一に教授ポスト人事を競争制にすること、第二に大学の哲学コースのカリキュラムを共通にすること、第三にリージェント制度を廃止し専門教授制度に変えることである。短期的には、この改革案はほとんど実現せず、わずかにキングズ・カレッジに独立のギリシア語講座が設けられた程度であった。けれども、たとえば、カリキュラムの統一が成功していれば、次の世紀の啓蒙的な改革が妨げられたかもしれない。

アバディーンでのさらに大きな変化は、委員会が、1715年のジャコバイトの乱でジャコバイトを支援した第10代マーシャル伯爵と多くの教授を弾劾し、キングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの10名の教授の地位を剥奪し、新しい教員を任命したことであった。新たに採用された教授陣のなかでは、リードとジョン・ステュワートを教えることになるターンプルが最も有名である<sup>10)</sup>。

こうして、マーシャル・カレッジにおいて、ターンプルは1721年にはリージェントとなって3年制の授業を受け持ち、クラスの学生が1723年に卒業するまで持ち上がった。ターンプルは、自然哲学と道徳哲学を方法論的に結びつけた思索へと学生を導いたが、それはターンプル亡き後に結成される「アバディーン哲学協会」(1758-1773)の特長ともなった。ターンプルは、シャーフツベリの思想をよく研究して、それを道徳哲学の講義に利用した。ターンプルはハチスンに負っているとされることが多いし、冒頭に述べたように、自らもそう認めているものの、このようにシャーフツベリから多くの思想を引き出したのである。

この時期に彼はロバート・モールズワースと

10) Ulman, H. L., "Introduction," *The Minutes of Aberdeen Philosophical Society*, Aberdeen U. P., 1990, pp. 18-19.

直接に文通をした。アイルランドの貴族で「オールド・ウィッグ」の指導者であったモールズワースの『1692年のデンマークの事情』(*Account of Denmark as it was in the Year 1692*)は非常な評判を獲得し、ロックとシャーフツベリも注目した著作である。ターンブルも『デンマークの事情』を読んで心服していた。それはリアル・ウィッグの思想原理を述べたものであり、その綱領とも見なされるものである。かつてデンマークに大使として赴任していたモールズワースは、名誉革命後の「自由なイングランド」と「デンマークの隷従」を対比し、聖職者の権威から解放され、道徳的価値を教え、歴史と文学・思想の幅広い研究を提供する自由な教育制度こそ、自由の最上の保証であると論じた。モールズワースはシャーフツベリと親密であったが、1721年にトーランドがモールズワースとシャーフツベリの手紙を何通か出版したために、二人の親密な関係は世に知られるにいたった。

理神論者として警戒を抱かれていたトーランドは、アイルランド出身のジャーナリストとして、ハリントン、ロック、ミルトンなどの共和主義的、あるいは民主主義的な文献を出版していたが、その思想は一部の信奉者によって熱烈に支持されていた。

#### モールズワースとの文通

そこでターンブルはモールズワースに手紙を書いた。最初の手紙で、わたしはアバディーンの新しいカレッジの哲学教授になっているのだが、「古代人の研究」をしようとしている。そして「自由と徳の利益を増進し、若い世代の趣味を改革すること」を自らの職務にしているのだが、「この国の教育の基礎は惨めである」と訴えている。第二信では、わたしが知っているグラスゴウ大学の若い学者は推奨に値する「自由で寛大な精神」を発揮した。「わたしは自由と真実の利益と人類愛を推進するために自分にでき

る何かで貢献できれば」幸せである。

「公共の自由の礎石が置かれなければならないのは若者の教育のうえにであります。しかし、真の哲学と有益な学問研究をかくも軽蔑されるものとした形式的な教義的精神はいつガウンと切り離されるのでしょうか。またいつわたしたちの学院は公共にとって真によく、健全な、温床になるのでしょうか。いつわが若者が大学から自ら担ぎ出しているきわめて無意味な積荷の怠惰で銜学的な中身をすべて追放するのでしょうか。またいつかつて国家と社会を統治し、英雄と愛国者を生み出した哲学がそのあいた場所に定着するのでしょうか。」<sup>11)</sup>

品がよく自由な性格を形成する「学問と技芸」が哲学と再び結合するのはいつか。わが大学が「傲慢な銜学的な僧侶の監視下にある限り」、こういったことはたんなる夢物語に熱中するに等しい。彼らの利害は「無意味な形而上学的教義とカテキズム」を若者に教え込み、すべての「疑問と探究」を軽蔑するように習慣づけ、若い「理解力」を奴隷的なものにし、すべての「自由思想」に反感を持つようにさせるのである。ターンブルは、このように訴えた。

モールズワースはターンブルの手紙に感銘を受けて、著作集を送った。第三信ではターンブルは自らの能力を高めるために、旅行付添教師の職を探して欲しいと懇請したが、実現しなかった。ターンブルは新しいクラスを受け持ち、1726年まではリージェントを務めた。この間に、ターンブルは、トマス・リードを教え、アバディーン啓蒙のある種の父となった。ノートン<sup>12)</sup>はリージェントであった時期を1721年

11) 引用は、Stewart, M. A., "George Turnbull and Educational Reform," *op. cit.*, p. 96.

12) Norton, D. F., *David Hume, op. cit.*, p. 152.

から1727年と書いている。

1725年3月にターンプルは学長ブラックウェル (Principal Blackwell) との関係で持ち上がった騒動の多数派のなかにいた。夏の終わりに、ニュートンの弟子として知られるコリン・マクローリンとスコットランド旅行をした後に、ターンプルは在籍のままアドニ家 (Udney family) の旅行付添教師となって大陸に出発した。

オランダで活躍していたユグノーの教授ジャン・バルベラックの弟子で、フロニンヘンから帰国したばかりの、スコットランド人のロバート・ダンカン (Robert Duncan) に代講者になるように取り決めることは、エディンバラの歴史学教授、チャールズ・マッキー (Charles Mackie) に依頼した。マッキーはランケンのメンバーであった。

しかし、10月12日に大学は彼に帰国命令を出した。新学年が始まろうとしているのにターンプルがいないのはクラスにとって非常に有害なので、最終決断に関して返事を送るように学部は全員一致で合意した、という手紙がターンプルに送られた。10月20日付けでターンプルはフロニンヘンからマッキーに手紙を書いた——アバディーンの人たちの気持ちは分からない。マッケイル博士とヴァーナー氏にわたしは二度手紙を書いたが返事が来ない。この冬にわたしは帰国するつもりはない。彼らは好きなようにするがよい。あの地と関係がなくなるのがどんなに幸運と思っていることか。アバディーンから離れ、もっとよい何かをどんなにわたしは願っているか。

しかし、大学の決議に応じて、1月にはターンプルはアバディーンに戻っていた。彼はもう一学期いて、マーシャル・カレッジ初の文学博士 (LLD) を得て辞任した。1726年のことである。

## II アバディーン以後のターンプル

ターンプルはニッドリのアンドルー・ウォチョープ (Andrew Wauchope of Niddry) の5年間の旅行付添教師となった。彼らの旅程はエディンバラから、フロニンヘン大学、ユトレヒト大学、およびラインラントとフランスであった。

1732年から1733年にかけて彼はロンドンからマッキーに手紙を書いて、将来の壮大だが曖昧な計画を述べた。この時期になると、彼は、マッキーとマクローリンに、スコットランドの大学にもっとよい職を探して欲しいと懇請しなくなった。目をオックスフォードに向けたからである。チャールズ・タルボット (Charles Talbot) の忠告に従って、ターンプルは1733年の秋学期にエグゼター・カレッジに登録し、同等の学位保有者として BCL (Bachelor of Civil Law) の学位を得た。ターンプルは国教会に入る意図であった。この頃、広教会派のトマス・ランドル (Thomas Rundle) と彼の仲間に接触したが、それはランケン・クラブ出身者がロンドンに来た場合に通例のことであった。

ターンプルは1735年の8月には依然としてロンドンにいて、独立出版の企画、学問奨励協会 (Society for the Encouragement of Learning) の賛同者となった。彼は1737年4月から1739年5月まで協会の会合に定期的に出席した。あるときは『古代絵画論』 (*Treatise on Ancient Painting*) の出版のための支援を得たいとも思っていた。またあるときは秘書を務めている同郷のアレグザンダー・ゴードン (Alexander Gordon) の後釜におさまりたいと思っていた。

1735年から37年の間のある時期に、彼はロッキンガム卿の息子のトマス・ワトソン (Thomas Watson) の旅行付添教師としてイタリアにいた。そこで『古代絵画論』を思いついた。おりしもイタリアに滞在していたアラ

ン・ラムジー・ジュニア (Allan Ramsay, Jr.) は、帰国したターンブルからパデルニ (Padermi) の絵画を入手できないかと頼まれることになったが、望みを満たせなかった。

1739年にターンブルは「学問奨励協会」の会計責任者のトマス・バーチ (Thomas Birch) を通じて、ホードリ主教 (Bishop Hoadly) から聖職叙任を得たいと考えた。彼はまたバーチを通じて自分の著作の予約購読者を獲得しようとした。しかし、バーチとの関係はさほど親密ではなかった。バーチの親友であったウォーバートン (Warburton) は『道徳哲学の原理』(*The Principles of Moral Philosophy*) ——そのなかでウォーバートンのポープ擁護に触れられていた——を買って欲しいという要請に応答して、「貴方の説明を聞くまでは、ターンブル博士のことも彼の本も聞いたことはない」とバーチに述べた。

しかしながら、ホードリヤリチャード・ミード (Richard Mead) と知り合ったことで、ターンブルはコート派 (宮廷派) に近づくことができた。ハイネキウス (Heinneccius) の『普遍法の方法体系』(*Methodical System of Universal Law*) の注釈つき翻訳を、ターンブルは1741年にカンバーランド公爵 (Duke of Cumberland) に献呈することができた。その年に、ターンブルは公爵の政敵、皇太子 (Prince of Wales) の名誉牧師となっていた。その当時、ターンブルはキューに住み、数名の生徒を下宿させていた。

1742年にターンブルは第二の職を得た。すなわちランドゥルが彼をドラマチョーズ (Drumachose) の教区牧師に任命してくれたのである。それはリマヴァディ (Limavady) の小さな田舎町の真ん中にぽつんとあるアイルランド人の教区であった。ターンブルは『自由教育の考察』(*Observations upon Liberal Education*, 1742) を献じてランドゥルを讃えていた。6年後に彼はオランダを再訪したが、そのときにターンブルはハーグで他界した。

ターンブルは1730年代から40年代にかけて、精力的に著書を出版した。金銭が必要であった。しかし、それだけが目的ではなかった。

『古代絵画論』や『自由教育の考察』は、教育改革、道徳の実例による教育における歴史と技芸の役割の強調とともに、よく知られているが、それ以外に、『三論』(*Three Dissertations*, 1740) やユスティヌス (Justinus) 『世界史』(*History of the World*, 1742) の翻訳への序文は無視されている。『道徳哲学の原理』は1740年に出版されたが、アバディーン時代の講義を組み込んでいる。またターンブルは『イエス・キリストの教義と奇蹟の間の関係に関する哲学的探究』

(*Philosophical Enquiry concerning the Connection betwixt the Doctrines and Miracles of Jesus Christ*) を1726年に執筆した。それは彼が外国に行っていた1731年にロンドンで出版されている。

こうした著作に示されているのは、ターンブルが生涯を通じて、道徳と宗教を哲学的に擁護しようとしたことである。ターンブルの道徳の体系は歴史から知識を得た人間本性の学を基礎にしており、それは自然哲学と構造的に同一であった。宗教は完全な科学の自然な帰結であるとされた。彼は絶えず自然と科学の方法に言及する。道徳と宗教の相互の独立性という道徳感覚論者の信念を所与とするが、しかし彼は、不死への宗教的信念のなかに有徳な行為への補足的な動機をなお求めようとした。また有徳な行為への報償も見出そうとした。こうした二つの関心が『哲学的探究』では「経験」experiment という概念において一体になっている。この概念は初期著作には登場していない。ターンブルの言う経験とは実験ではなく、何かの例示による証拠であり「適切なサンプル」である。キリストの来世に関する教えは、(死者を蘇らせるとか、長い幸福と繁栄を推し進めるといった) 奇蹟が与える力の「自然な適切な事例」にほかならず、奇蹟によるこの世の「経験的証拠」に

従うのである。

### Ⅲ 教育改革論

モールズワースへの手紙において仄めかされた教育改革論は、『古代絵画論』(1740)や『自由教育の考察』(1742)、ユスティヌスへの序文(1742)などにおいて十分に展開されているが、その眼目は言語や論理の抽象的な教育を初期から行うことをやめて、歴史にしっかり基礎づけられた教育を行うということにあった。市民社会史は世界史からの自然な発展であり、人間本性の学の必然的な前提であった。人間本性の学は統治制度や道徳体系へと展開されることになる。そうしてすべては、目的因の研究を通じて自然宗教へと導かれる。

「自由の価値が最もよく学ばれるのは人類の歴史においてであるが、自由が失われ、また守られる仕方も同じである」とモールズワースへの手紙に記したターンプルは、モールズワースの「デンマークの聡明な説明」を例に挙げている。

なぜターンプルはモールズワースに手紙を出したのだろうか。それは、不寛容な聖職者の支配、専制政治に反対したモールズワースの自由な思想に惹かれたからであろう。手紙を出したのは彼だけではなかった。ランケンの仲間の中にはウィリアム・ウィシャート(William Wishart)がいたが、エディンバラ大学の学長の息子で若い牧師であった彼もまたモールズワースに関心を持っていた。グラスゴウの学生の幾人かに対する共通の友情が表面的な理由であった。彼らにモールズワースもターンプル、ウィシャートも共通の友情を抱いていたというのである。

グラスゴウではアイルランドから来た神学生は特に反抗的であった。グラスゴウの長老派は厳格なカルヴィニズムを特徴としていた。彼らはシャーフツベリの社交性の哲学を墮落と結び

つけていた。教会の権威主義、不寛容は異端排斥運動としてしばしば猛威を振るっていた。前世紀末のトマス・エイケンヘッドの異端審問による処刑は衝撃的な事件であった。シムスンが異端として排撃されるという、シムスン事件もあった。グラスゴウは敬虔主義的雰囲気の良い街であった。こうした抑圧的な雰囲気がアイルランドから来た学生の排斥につながったように思われる。

1717年にハチスンが張本人として関係した出来事、ハチスンのダブリンでの出版人にやがてなった学生の1722年の排斥、ハチスン自身のダブリン時代の学生の1725年の排斥などの一連の事件があった。

1724年にはウィシャート自身がグラスゴウの説教壇に立つことになった。ウィシャートは学生クラブに積極的に参加し、1728年には学部長に招聘され、翌1729年にはハチスンの教授選出に役割を果たした。こうした動きにはシヴィック・ヒューマニズム的な思想が含まれていた。失われた自由の回復、人格的な徳と公共的な徳の追求、教会の権威主義の終焉といったレトリックはすこぶるモールズワース的であるが、しかしもともとの正確な政治的争点を曖昧にする側面があった。

グラスゴウ大学の教授の多数派は、学長と名誉総長(Chancellor)、学部長、神学教授などの固い結束を破壊し、大学の運営を全体のものにしようとした。そのためには学部長の任命において学長と名誉総長が手を結ぶのを阻止しなければならなかった。彼らは学生とともに学部長選挙の古い方式を復活し、学生を励まして、彼らの「自由」の復活を大学が支持するように仕向けようとしたのである。モールズワースは彼らの不平を議会に提出するつもりであったが、しかし1726年から27年にかけての学生の勝利をもたらす政治的变化が起こる前に、他界した。

こうしたグラスゴウ大学の改革が、ターンプルのアバディーンでの改革運動のモデルとなっ

た。ターンブルは1725年にアバディーンの大  
学政治に関与した。グラスゴウとの違いは学  
部長が学部の多数派と共に学長に対立する  
という構図にあった。騒動のきっかけは学  
部長を選出する学生の権利であった。マー  
シャル・カレッジではこの権利は維持され  
てきた。しかし、1725年に学長が選挙手  
続きを拒否した。その理由は、選出手続  
きに不規則な点があること、また選挙に  
参加する学生のカレッジの代議員が、現  
宗教体制に不満を持っているということ  
であった。

学長派は学部の残りに数で負けていた。学  
長の反対派は当然のことながら、選挙を  
進めた。学長派は選挙結果を承認しな  
かったために、学内法廷に召喚されたが、  
召喚に応じず、逆に高等民事裁判所か  
らの支持を取り付けた。その結果、学  
長派への学部の不満を増すことになっ  
た。

学長は「多くの抑圧策で学部の平和、秩  
序と権利を覆し、その名誉と独立を汚し  
た」のであるが、こうした「大学の自由、  
不可侵の権利への侵害」を終結させる  
ことを彼らは訴えた。

この訴えは、1724年に学長が市会と共  
謀してマクローリンの常習的欠勤を譴  
責したことに対する、マクローリンと  
彼の味方による報復行為であったよう  
に思われると、M. A. ステュアート  
は解釈している<sup>13)</sup>。

こうした騒動は、感情的となっていた  
ターンブルがアバディーンを離れる十  
分な理由になるだろうか。大学の政治  
も、神学にかかわる政治も激しかった。  
俸給はわずかであった。ターンブルの  
俸給400スコットランド・ポンドは  
イングランド平価では35ポンドに過  
ぎなかった。学問的にターンブルは野  
心家であった。たくさん著作を意欲  
的に書いた。しかし、いかに恩顧の時  
代とはいえ、彼の求職を嘆願した数多  
くの手紙は、彼の名声を高めること  
にはならなかった。ターンブルの哲  
学の重要性、独創性を

証明するものは、著作にも卒業論文  
にもなく、またマーシャル・カレ  
ッジでシャーフツベリの社交性の哲  
学を教えたのも彼が最初というわけ  
でもなかった。デイヴィッド・ヴァ  
ーナー (David Verner) が一足先  
にシャーフツベリの哲学を1721年  
に自分の授業で紹介していた。しか  
がってターンブルが成功する材料は  
あまりなかったのである。

さらにターンブルはカリキュラム改  
革も実現できなかった。アバディ  
ーンでは相変わらず言語教育が初  
年度にあり、道徳哲学と自然哲学  
が後回しになっていた。道徳哲学  
と歴史は関連なしにばらばらに  
教えられていた。教授制度の導  
入も遅れた。

スコットランドの大学では最後に  
設立されたエディンバラ大学は、  
ウィリアム・カーステアズ (Will  
iam Carstares) の指導によっ  
ていち早く1710年に専門教授制  
度を導入して、大学改革の先頭  
に出た。カーステアズの念頭に  
あったのはオランダの大学の  
教授制度であった。

それに対してマーシャル・カレ  
ッジのカリキュラム改革は1750  
年代まで待たなければならな  
かった。そのときに自然と市民  
の歴史講座が設けられた。し  
かし、1755年のアレグザン  
ダー・ジェラード (Alexander  
Gerard) の教育改革の宣言  
は、モルズワースとターンブル  
ではなく、古代のストア派と  
ペイコンを権威として掲げた。

リージェントとしての1721年  
からの6年間に、アバディ  
ーン大学ではこれというほどの  
教育改革の成果を上げることが  
できなかったけれども、ター  
ンブルは、リードを教え、影  
響力を残したように思われる。  
またターンブルは私教師とし  
ての教育では能力を発揮した。  
教え子はフロニンヘンでも、  
エディンバラでも彼の勧め  
るように、歴史の授業に登  
録した。

それでは、アバディーン啓蒙  
の父とされるターンブルは  
独創的な、あるいは重要な  
思想家なのか否か、研究者  
の見解は分かれる。ステ  
ュ

13) Stewart, M. A., *op. cit.*, p. 101.

アートは評価が厳しく、ノートンは比較的评价する傾向にある。ハチソンは「モラル・センス」を核とした体系的哲学を構築し、教え子リードは「コモン・センス」哲学の体系化によって学問的に成功したが、ターンプルは「コモン・センス」の概念を援用した道徳哲学を著しながらも、彼らほどの名声を得ることはできなかった。

とはいえ、リード哲学への関心の高まりは、リードの師としてのターンプルへの関心の復活につながり、ノートン、ウッド、ステュアートなどによって研究が進められてきた。ターンプルを研究することによって、アバディーン啓蒙はよく分かるようになってきたし、エディンバラからの影響、グラスゴウとアイルランドの共和主義思想の波及という側面があることも浮かび上がってきた。しかし、ターンプルはたんなるサンプルに留まったわけではない。自然哲学と道徳哲学そして神学を一体として論じようとする思想構造が古いことは否めないが、1720年代から30年代にかけてのターンプルの思想には先駆的な側面もあった。ステュアート以上に、その側面をもっと重視すべきであろう。

#### IV ターンプルの教育論と道徳哲学

ターンプルの教育論は主として若い紳士の教育論であった。ロック『教育に関する考察』（1693）は古典語教育から始める教育を断罪し、自国の言語と歴史の教育から始めることを推奨した。ルネサンス以後のヨーロッパの教育と同じく、イングランドのチューダーからステュアート朝にかけて創立された古典的な学校では、法曹と聖職を目指す子供にギリシア、ラテンの古典を教えた。日常生活では使われない古典語の習得、暗記に膨大なエネルギーが投じられた。ロック自身がウェストミンスターのグラママー・スクールでリチャード・バスビー（Richard Busbie）から厳しく鍛えられた。バスビーは暗記できない子供に容赦なく鞭を加え

た。ロックはこのようなグラママー・スクールや寄宿学校ではなく、家庭教育を推奨し、近代の有益な学科を洗練された有徳な家庭教師によって教えることを望んだ<sup>14)</sup>。

こうしたロックの教育論は18世紀のイングランドの紳士教育の手本になっていったが、ターンプルもまたロックの教育論の精神を継承し、それを大学教育に生かそうとした。

当時の英国の貴族、ジェントリ、エリート家族は子弟をイトンやウェストミンスターのような寄宿制のパブリック・スクールにやるべきか、それとも家庭教師を迎えるべきかに悩んだ。スコットランドでは大学に進むのが多かった。

グラママー・スクールも、大学教育も経験したうえで、シャーフツベリの家庭教師となったロックは家庭教育を支持した。しかしながら、ロックの反対論にもかかわらず、学校の教師たちはローマの学校教師、クインティリアヌス（Quintilian）の『雄弁論』*Institutio Oratoria*の議論に依拠して、学校教育の利益を主張していた。彼の『雄弁論』は厳格な弁論教育によって若者を訓練し、キケロのような人物を作ることを目指していた。ルネサンスの教育は、クインティリアヌスの『雄弁論』をモデルとしていた。彼の権威は決して18世紀に小さくなったわけではなかった<sup>15)</sup>。

ターンプルは40歳を超えてから二つの充実した著作を刊行した。2巻本の大冊『道徳哲学原理』（1740）と『自由教育の考察』（1742）である。後者において、第一によく言及されているのは、キケロ、ソクラテス、プラトンの3人で、次によく参照されているのは、クインティリアヌス、アリストテレス、ホラティウス、ロッ

14) George Turnbull, "Introduction", Terrence O. Moore, Jr., *Observations upon Liberal Education, in All Its Branches*, Liberty Fund, 2003, p. ix. 以下OLEと表記する。

15) *Ibid.*, pp. xii-xiii.

ク、プルタルコスPlutarchusの5人である。

クインティリアヌスQuintilianusは、文法と修辞学の教育(246)、子供に乳母を選ぶ(253)、悪習について(254)、教育者の質(260-61)、学生の懲戒(266)、正直さの教育(272)、学習を楽しむ(274)、上品さ(304)、からかい(冗談)について(312, 313)、洗練について(314)、美と有用性(406)、文学について(413)といった論点で登場する。『道徳哲学原理』でもクインティリアヌスは登場するが、こちらでは、早期教育の重要性と(455)、模倣(136)、幾何学の教育上の有用性(456)の典拠として登場する程度である。(カッコ内はOLEのページ)

徳を教えることが眼目であるが、子供の能力を開発するとともに、子供を墮落させないように、いかに理性的に教育するかという、実践教育論が説かれている。

ターンプルの著作は、1720年代から30年代にかけてのスコットランドとアイルランドの長老派の新世代の主要な思想潮流をよく反映している。その意味では、当時の思想の典型がみられる。ロックとニュートンへの関心、シャーフツベリShaftesburyの影響は、アバディーンのみならずスコットランド啓蒙の全般的傾向であった。しか

し、グラスゴウではカーマイケルCarrollによるプーフェンドルフPuffendorfの導入によって、大陸自然法思想が重要な道徳哲学の枠組みを提供した。

しかしながら、ターンプルにおいては大陸自然法学の影響はほとんどみられない。自然法の概念自体は当然持っているけれども、ターンプルの名著と目される『道徳哲学原理』(1740)でグロティウスGrotiusとプーフェンドルフに触れているのはただ一度に過ぎない。最もよく参照されているのは、キケロである。次にアレグザンダー・ポープAlexander Pope、シャーフツベリ、ハチスンHutcheson、プルタルコス、ホラティウスHorace、プラトン、ロックの順に多く、その次に比較的参照されている著者として、アリストテレスAristotle、アデイスンAdams、ベイコンBacon、バトラーBatler、サミュエル・クラークSamuel Clarke、エピクテトスEpictetus、ホップズHobbes、マンデヴィルMandeville、ニュートンNewton、クインティリアヌスなどを挙げるができる。したがって、ハチスンとの類似性があるといっても、それは大雑把な印象に過ぎない。

それではターンプルの教育論と道徳哲学はどのような議論を展開しているのか、その特徴をいっそう明確に把握するために、この2著作を紐解かなければならない。